

令和3年度「不登校に関する研修会」(第4回) 講義記録

1 日 時 令和3年11月2日(火) 10:15~12:00

2 場 所 兵庫県民会館

3 講 師 神戸大学大学院 鳥居 深雪 教授

4 テーマ 不登校の子どもの育ちを支える

5 内 容

(1) 事例を通して考える。

- ・合理的配慮(障害者差別解消法改正)・・・障害のある人からバリアを取り除くために配慮を求める意思の表明があった場合、負担が重すぎない範囲で対応する。
- ・障害のある子供の教育支援の手引・・・R3年6月「教育支援資料」の改訂
- ・医療的ケア児支援法・・・R3年6月18日公布、R3年9月18日施行：在籍する医療的ケア児に対し適切な支援を行う責務
- ・STEAM教育・・・Science、Technology、Engineering、Art and Mathematics
- ・Society5.0・・・サイバー空間とフィジカル(現実)空間を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会(Society)
- ・遠隔教育・・・同時双方向型(双方向(同期型)、別空間)、オンデマンド型(一方向(非同期型)、別空間)
- ・Neurodiversity・・・神経学的多様性、脳の多様性
- ・児童生徒の包括的理解には多様な要因を探る。

ア 子どもの発達：発達のみならず、育ちの過程(相談歴・教育歴)

脳機能：実行機能、注意機能、学習、社会性

イ 環境との関係：学級集団の質(いじめ被害)、担任との関係、家庭環境(親子関係、貧困、虐待等)

(2) 合理的配慮とアドボケート

・思春期の発達課題

ア 思春期特有の課題

- ・タテマエとホンネの二重構造、仲間関係
- ・思春期の混乱 理想の自己と現実のギャップ
- ・自分の特性理解 セルフスティグマの問題

イ 失敗経験→自己肯定感の低下→二次的な問題

ウ 小6から中1で不登校は急増する。

エ 高学年 抽象的な学習、メタ認知が必要になる。

オ 中学校 授業が理解できない。→不適応（LD、境界域知能）

- ・大人（教師）が介入できるのは高校までである。

→高校卒業後は、自分から求めなければ、何の援助も受けられない。

- ・「助けて」と言えない。

大人の「ひきこもり」、援助を拒否する男性、餓死する社会的弱者（高齢者、貧困世帯）、2019年まで減少していた自殺者の増加（コロナ禍による？特に女性）、児童生徒の自殺者は増加、援助を求めることは恥と思う人たち（頑張ることが美德？）

- ・サポートを受けるのは恥ずかしい？自分で頑張る人が立派な人？

→いいえ あなたが、よりよい成果を上げるために必要である。自分の限界がわかる人が立派な人である。

- ・サポートや相談が必要な時・・・自分にとって苦痛が大きい。がまんするだけで精いっぱい。かなり頑張ればやれるけど持続は難しい。少しのサポートがあればスムーズにやれる。どうしてなのかわからないけどどうまくいかない。

- ・サポートのレベル

ア 日常レベル

具体例：忘れていたら声をかけて、忘れ物しちゃったら貸して、勘違いしていたら教えて

イ 周囲に理解を求めるレベル

具体例：ノイズキャンセラーを使う。ノート代わりに写真を撮る。（合理的配慮）

ウ 特別な配慮レベル

具体例：手話通訳・字幕をつける。試験時間を延長する。チェック回答を認める。（合理的配慮）

※合理的配慮の例

- ・感覚過敏に対して：音の刺激を減らすために椅子や机の脚にカバーをつける。特殊なメガネの使用を認める。
- ・実行機能障害に対して：スケジュールの提示、To Do Listの作成、ワークシートの使用、外部記憶の活用
- ・読み書きの障害に対して：タブレットの使用、Daisy教科書またはデジタル教科書の使用、読みやすいフォント
- ・言語理解の困難に対して：ゆっくりはっきりと話す。わかりやすい日本語を使う。
- ・不器用さに対して：机といすの高さの調節、OTからの助言の活用
- ・紙の色によって見え方が変わる人もいる。黄色い紙やグレーの紙の方が見やすい人もいる。
- ・フォント（文字のデザイン）によっても違う。読みにくいフォント（明朝体、教

科書体)、読みやすいフォント(丸ゴシック体、ゴシック体、メイリオ体、UD デジタル教科書体)

・感覚の問題に対して

(ア) 聴覚過敏 イヤーマフ、ノイズキャンセリング、デジタル耳栓、静かな環境、座席の配慮

(イ) 視覚過敏 視線を嫌がる場合もある。無理に目を合わせない。偏光レンズや遮光レンズなどの使用で改善する場合もある。

(ウ) 色覚の問題 わかりやすい色の使い方

(エ) 味覚、嗅覚、皮膚感覚 等

・セルフアドボカシー 可能性を最大限に発揮するために必要な力

自分の困難がわかる。自分に必要なサポートがわかる。必要な場面でサポートを求める。サポートが必要な理由を説明する。

・セルフアドボカシー 自分の権利を守る力

自己理解 ・自分にできることと困難なことを理解する。

援助を求める力(主張性を含む) → 幼児期から育てたい。

必要な場面で援助を求めることは、恥ずかしいことではなく、よりよい成果を上げるために大事なことである。

(3) 多様な児童生徒への支援

・多様な子ども

人種・民族、宗教など、家庭環境(家族、経済力、文化的背景)、性(LGBTQ)、年齢(発達段階)、特別なニーズのある子ども

※特別なニーズは、発達多様性(Neurodiversity: 脳の多様性)、障害、貧困、虐待・ヤングケアラー等の福祉的問題、外国籍(母国語の違い)、不登校などの不適應、被災や被害等の後の心理的援助、医療的ケア児

・発達多様性

適應状態がよい場合「障害」という必要がない。

→ 高機能(知的障害がない)発達障害で専門職についている人: 医師、研究者 等

→ 知的障害があるが就労して円満に地域生活を送っている人

置かれている環境によって異なる。当事者の自己理解と進路選択が重要である。

・知的障害・・・発達期に発症し知的機能と適應機能両面の欠陥を含む障害

ア 知的機能の欠陥(IQ70±5以下)

イ 適應機能の欠陥(日常生活上の一つ以上の活動に限界がある。

IQだけではなく、社会性、実生活、各側面に発達の遅れ、各側面における困難さにより軽度、中度、重度、最重度のレベルを判断する。

・自閉スペクトラム症(自閉スペクトラム症/自閉症スペクトラム障害)

ア 社会的コミュニケーションと対人的相互反応の障害

イ 行動、興味、および活動の限定されたパターンの繰り返し：変化への弱さ、感覚の問題（過敏、鈍麻）

人によって困難のあらわれ方は多様である。症状は成長してから明らかになることもある。不適応の状態がある。

・ ADHD（注意欠如・多動性/注意欠如・多動性障害）

①多動性と衝動性 ②不注意

3つのタイプ・不注意優勢型 ・多動性-衝動性優勢型 ・混合型

・ 学習障害…一般的な知的発達に遅れがないにもかかわらず学習が困難である。

①読むことの障害 ②書くことの障害 ③算数の障害

・ 発達性協調運動症

①不器用：手先がうまく使えない。 ②極端に運動が苦手である。

→鉄棒やなわとびができない、習字が汚い、楽器の演奏が苦手 等

・ 境界域知能

ア IQ70(75)～85の知的レベルの子どもたちは、知的障害にはならないが、学習上の困難さを持っている。

イ 困難を持っているにもかかわらず、支援の対象とされない。

ウ 自尊感情が低下する。

エ 養育環境が適切でないと、非行事例として問題化する。

・ 児童虐待

①身体的虐待 ②心理的虐待 ③性的虐待 ④ネグレクト（教育虐待、経済的虐待）

子どもの成長発達に深刻な影響を及ぼす。

過剰な介入、叱責よりも安定した関係を経験することが重要である。学校内外での連携をとる。

・ RTI と三階層モデル

指導に対する効果によって通常の教育から手厚い指導までニーズを判断する。

第1層…わかりやすく工夫した授業（ユニバーサルデザイン）

第2層…個への配慮→合理的配慮、通級による指導

第3層…最も手厚い指導→特別支援学級、特別支援学校

UDはクラスの生徒全員のための通常の授業の工夫。特別なニーズがある子どもには個別の配慮や特別な場が必要である。

(4) まとめ

・ すべての子どもの多様性を尊重しニーズに応じた教育を保障する。

・ 環境との関係で状態像は多様である。「援助」はよりよい成果のために行う。セルフアドボカシーが重要である。最終目標は、その人らしく成長し人生をおくることである。